Title	トマソン・コレクションの全体像 ：G・K・フォーテスキューによる「目録への序文」の翻訳を中心に
Author(s)	松谷，好明
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.28, 2004.2：196-249
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4138
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

トマソン・コレクションの全体像

――G・K・フォーテスキューによる「目録への序文」の翻訳を中心に――

松谷好明

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　G・K・フォーテスキュー「目録への序文」（一九〇八）（翻訳）
Ⅲ　「マイクロフィルム版索引への手引き」（一九八一）（翻訳）

Ⅰ　はじめに

本大学図書館にはさまざまな貴重な文献、マイクロフィルム、テープが所蔵されているが、中でも、二〇〇〇年三月に納められたいわゆる「マイクロフィルム版トマソン・コレクション」（トマソントラクツとも呼ばれる）ほど異彩を放つものはそれほど多くはないであろう。イギリス史、特に近代社会の成立にとって極めて重要な意義を持つ一七世紀のイングランド歴史研究にとって、トマソン・コレクションの資料的価値はどれほど強調してもしすぎることは決して

ない。

トマソン・コレクションとは、一七世紀ロンドンの書籍商ジョージ・トマソンが、一六四〇年の短期議会開催時から一六六〇年の王政復古とその直後の時期に至るまでに組織的に収集した約二万四千点に及ぶ「パンフレット、本、新聞、手書き文書」のコレクションのことである。本論IIにおいてG・K・フォーテスキューが詳述する如く、この希有なコレクションはまことに数奇な運命をたどりながらほぼ完全な形で保たれ、創立（一七五九年）間もない大英博物館に一七六二年頃、国王ジョージ三世の財政的援助により寄贈された。

かくしてトマソン・コレクションを取得した大英博物館は、そのコレクションに納められた貴重な一級資料の閲覧を広範な人々に可能とした。ホイッグ史観の代表作『イングランド史』(History of England from the Accession of James the Second, 1648-61. 5vols.) を書いた初代マコーリー (Macaulay) 男爵トマス・バビンドン (Thomas Babington, 1800-59) はじめ、ピューリタン革命史研究の一大金字塔と目される『大内戦史』(History of the Great Civil War, 1642-49, 3vols.) を著わしたサミュエル・ローソン・ガードナー (Samuel Rawson Gardiner)、『オリヴァー・クロムウェル演説・書簡集』(The Speeches and Letters of Oliver Cromwell, 1845) を編んだトマス・カーライル (Thomas Carlyle) など、一九世紀の著作家たちはいずれも、トマソン・コレクションを大いに利用してそれらの著作をものしたことが知られている。

この間大英博物館は、ジョージ・トマソン自身が収集、整理に当たって用いた方法を生かしつつ、全トラクト（収集したパンフレット、本、新聞、手書き文書）の目録作成の作業を続け、ついに一九〇八年、その成果を二巻本の形で公刊した。それが、『ジョージ・トマソンによって収集された、一六四〇―一六六一年の、内戦・共和国・王政復古にかかわるパンフレット・本・新聞・手書き文書の目録』(Catalogue of the Pamphlets, Books, Newspapers, and Manuscripts Relating to the Civil War, the Commonwealth, and Restoration, collected by George Thomason, 1640-1661)

である。この『目録』は、大きく分けて三つの区分（section）から成っている。第一区分は、一六四〇―六一年の、新聞を除く全トラクトの名称が、時系列的に（何年何月何日と）、並べてある。第二区分は、一六四一―六三年の新聞の名称、第三区分はアルファベット順の索引である。

この『目録』刊行に当たって、当時の大英博物館図書部長（Keeper of Printed Books）G・K・フォーテスキュー（G. K. Fortescue）が長文の序文を書き、ジョージ・トマソンとそのコレクションについて知りうる限りのことを詳述した。この序文は、トマソン・コレクションを利用しようとする者にとって今日でも必読の一文であり、また、トラクトを直接利用しなくても、一七世紀以降のイギリス史、イギリス文化・社会史に関心を持つより多くの人々にとって極めて興味深いものであるゆえ、ここにその全文を訳出し、紹介することとした。但し、フォーテスキューの原文には段落の区切りがなく、今日の読者にとっては読みにくいため、ここでは訳者（松谷）が適当に段落を区切り、小見出しを付けた。

『目録』の公刊により、大英博博物館所蔵のトマス・コレクションはイギリスの歴史研究者にとってばかりでなく、日本を含む世界各国の研究者にとって格段に利用しやすくなった。とはいえ、一般の研究者がコレクションの中の特定の文献あるいはパンフレット、新聞を閲覧、あるいはコピーを依頼しようとする場合、従来は、一つ一つ大英博物館（図書館）の窓口に申請しなければならず、利用できる点数も大きく制限されていた。この障害を完全に撤廃したのは、トマソン・コレクション全体のマイクロフィルム化とその頒布である。すなわち、大英博物館は一九八一年、アメリカのUniversity Microfilms International社（UMI）と協同で「マイクロフィルム版トマソン・コレクション」を作成し、全世界に向けて販売することに踏み切ったのである。この「マイクロフィルム版トマソン・コレクション」は、本論Ⅲに詳述されている通り、二五六個のリールに納められた全トラクトのマイクロフィルムと、それに付された前記の『目録』、それに、『マイクロフィルム版索引』（Index to the Thomason Tracts 1640-1661）二巻から成っている。ただし、『目

録』は元々二巻本であったものが、この版では四分冊で発行されているため、注意が必要である（『目録』は赤い表紙、『索引』は薄茶色の表紙であるため、『目録』を赤本、『索引』を薄茶本とあわせて呼んで区別するのは便利であろう）。

「マイクロフィルム版トマソン・コレクション」は、このようにして、全世界の一七世紀イギリス史研究者にとって最も重要な一次資料の宝庫であったものを原理的には万人に開かれたものとしたが、いかんせん、購入には現在五〇〇万円前後の費用が必要であるから、わが国の研究者にとっては依然として利用が困難なものであった。しかし、この高額かつ貴重な、利用価値無限なものが、本大学図書館に納められているのである。本学内外の多くの研究者が、この小論を参照しつつ、『目録』、『索引』により、トマソン・コレクションの壮大な森に分け入っていただきたいと思う。

II　G・K・フォーテスキュー「目録への序文」（一九〇八）（翻訳）

ジョージ・トマソン

大英博物館（British Museum）の恩人リストの高位に、セント・ポールズ・チャーチヤード（St. Paul's Church Yard）［地名］の〝ばらと王冠〟（the Rose and Crown）［屋名］の書籍商ジョージ・トマソンの慎ましい名がある。学識や書誌学で際立ち、あるいは名声を博しさえしたイギリスの書籍商はこれまで少なからずいたが、トマソンほど目ざましい業績を上げた人はほとんどいない。

長期議会開催の完全な意義を把握でき、しかも、印刷所から毎日溢れ出る大量の当座用文書を後世の利用に供するため保存しようと決意を固めることができた同時代人は、確かに希有な歴史的先見性と想像力を備えていたが、それだけ

でなく、固い意志力と強じんな性格をもつ人でなければ一体だれが、激動、波乱万丈の二〇年にわたり、かくも困難な仕事に耐ええたであろうか。

トマソンの覚え書きと手書き文書の性格全体から、彼が教養のある学究肌の人で、鋭い観察者であったことは明らかである。また、多くの著名人と親交を結んでいたことも明らかである。ジョン・ミルトン（John Milton）やウィリアム・プリン（William Prynne）、ヘンリー・パーカー（Henry Parker）はじめ多くの人が、トマソンに自分たちの本を寄贈していた。一六五〇―五一年のラヴ陰謀事件［長老派牧師クリストファー・ラヴがチャールズⅡとその母ヘンリエッタ・マライアと共謀して、クロムウェルの共和制転覆を図ったとされる事件。ラヴは処刑される］当時、トマソンは、エドマンド・カラミー（Edmund Calamy）やウィリアム・ジェンキン（William Jenkin）といった著名な人々を含むロンドンの長老派牧師たちに大きな影響力を持つと指摘されており、また、遺書の中でトマソンは、自分の特に大切な友人としてジョン・ラッシュワース（John Rushworth）、トマス・バーロー（Thomas Barlow）について語ることができた。しかし、トマソンの生涯や人柄については、ほとんど知られていない。従って、トマソンの伝記ということになると、遺憾ながら、私には、『印刷出版業組合記録』（the Stationers' Registers）と『国事録』（the Calendars of State Papers）からの若干の抜粋以上には、確かでないことや推測以外に、提供できるものはほとんどない。

ジョージ・トマソンは、チェシャーのバックロー（Bucklow）郡の小村サドロー（Sudlow）在住のジョージ・トマソンの息子だった。父トマソンは『印刷出版業組合記録』に'Husband man'と記されているので、恐らく農民だったと思われる。一五五六年の市議会法（the Common Council 法）により、いかなる人も二四歳に達するまでは同業者組合のメンバーとしての権利を行使することが許されていなかった。従って、子ジョージ・トマソンが一六二六年に印刷出版組合のメンバーになっているところから、彼は一六〇二年か、それ以前に生まれたと見られる。一六一七年九月トマソンは、"Purchase his Pilgrimes"はじめ幾つかの有名な本の出版者であった、セント・ポールズ・チャーチヤード

の〝ばらの記章〟(the Sign of the Rose)[屋号]にあった書籍商ヘンリー・フェザーストン(Henry Fetherstone)のところに、九年間徒弟(apprentice)として入ることになった。

書籍販売・印刷出版業者トマソン

一六二六年六月五日、トマソンは、印刷出版業組合のメンバーとしての権利を得、その名が『組合記録』に「ジョージ・トムソン」(George Thompson)として登場する。ほとんど言うまでもないことだが、一七世紀には同一の人名に綴りが幾通りもあるのは例外ではなく、むしろその方が普通だった。このジョージ・トムソン(Thompson ないし Tompson)がジョージ・トマソンと同一人物であることは、組合記録のその後の幾つかの記載によって明らかに証明される。かくして一六二七年一一月一日、彼の前の親方であるヘンリー・フェザーストンがジョージ・トムソンの名の彼に、ウィリアム・マーティン(William Martin)著『イングランドのノルマン人と諸王の歴史』という本の版権を与えている。その版権を'Master Thomason'は一六三八年五月二一日、リチャード・ホウィッテカー(Richard Whitaker)に譲っている。

トマソンの主な商売は、出版よりむしろ本の販売だった。一六三六年から一六四二年ないし一六四三年までの間彼は、オクタヴィアン・プラン(Octavian Pullen)と組んでいたが、プランは一六二九年一二月一四日に印刷出版業組合のメンバーとして迎え入れられた人物だった。〝ばら〟のしるしを付けた彼らの店は、セント・ポールズ大聖堂の北側、セント・ポールズ・チャーチヤードの、大聖堂の北側の扉とセント・フェイス教会の間に位置していた。彼らの共同経営が終わったとき、トマソンは、チャーチヤードの別の区画にある〝ばらと王冠〟に移り、プランは一六六六年のロンドン大火で壊れるまで、元の〝ばら〟にとどまっていた。

一六三六年から一六三九年の間に二人のパートナーは六冊の本を出版した。そのうち四冊はそれほど重要でないが、残りの二冊は豪華な二つ折り版で、メディチ家のメアリのオランダ、イングランド訪問に関するものだった。本の名は、『王妃メアリの合同州国訪問記』(Histoire de l'Entrée de la Reyne Mère dans les Provinces Unies)、および『王妃メアリの大ブリテン訪問記』(Histoire de l'Entrée de la Reyne Mère dans la Grand Brétaigne)で、いずれも著者はフランスの歴史作家ジャン・ピュジェ・ド・ラ・サール(Jean Puget de la Serre)である。二冊ともホラー(Hollar)や他の人たちのすばらしい版画の挿絵があり、奥付が次のように記されている。すなわち「一六三九年、ロンドンで、セント・ポールズ・チャーチヤードの〝ばら〟のジョージ・トマソンとオクタヴィアン・プランのため、ジョン・ロワースにより[印刷]」と。

トマソンの次の出版の試みは不運だった。一六四五年、熱烈な長老主義者であるデイヴィド・ブキャナン(David Buchanan)が、内戦(the Civil War)期間中のスコットランド人の行動を賞賛し、イングランド議会とその軍隊を激しく攻撃する本を書いた。この本は「一六四五年、ロンドン」という奥付で、『明白なる真実』(Truth its Manifest)というタイトルのもと、匿名で出された。その内容は相当に不安をかき立てるもので大変な騒ぎとなり、議会両国委員会はその印刷者と発行者を探し出すよう命じられた。一六四六年一月三一日、書籍販売業者ジョゼフ・ハンスコット(Joseph Hunscott)から委員会において、次のような証言がなされた。すなわち、「ブキャナン氏は、ロバート・ボストック(Robert Bostock)の名で『明白な真実』の本を登録し、自分の費用負担で印刷したが、その後彼とボストック氏の間で値段について食い違いが起こり、ブキャナン氏は原版全部をジョージ・トマソンに売却した」というのである。

結局その本は議会両院により虚偽で問題ありと票決され、死刑執行人により焼却が命じられた。一六四六年、フィリップ・フレア(Philip Freher)が書いた『教会の平和論』(A Treatise touching the Peace of the Church)が、「すでにジョージ・トマソンのために印刷され、これから〝ばらと王冠〟にある彼の店で売られることになっている」と記録され

ている。

トマソンは一六五九年までそれ以上本を出版していないが、その年彼の店から出た真に重要な唯一の作品、すなわちジョン・ラッシュワース（John Rushworth）の『歴史的収集』（Histoircal Collection）の第一部を出した。奥付には「一六五九年、セント・ポールズ・チャーチヤードにある〝ばらと王冠〟のしるしの店のジョージ・トマソンのために、トマス・ニューカム（Tho. Newcomb）により印刷された」とある。一六八〇年から一七〇一年の間に出版された続く巻もすべて、この〝ばらと王冠〟――その時にはトマソンの後を継いだリチャード・クリスウェル（Richard Criswell）とトマス・コッカリル（Thomas Cockerill）の所有となっていた――から出されたことは多分、言及に値するだろう。

ところで、トマソンとプランは、書籍販売業者として商売を繁盛させるのに成功していたと思われる。著書『ボドリアン年代記』（Annals of the Bodleiam）の中でマクレイ博士（Dr. Macray）は、こう記している。すなわち、「この当時（一六四〇年以降）のほとんどの年、どの書籍販売業者から本の購入がなされたかというと、それはジョン・トマソンとオクタヴィアン・プランで、一六五〇年（この時までにプランの共同経営は終わっていた）計六九ポンド一〇シリングの値に達する大量の本――その運賃だけで一ポンド支払われた――が、ジョージ・トマソンから買われた」と。

長期議会開始と長老派トマソンの収集開始

一六四〇年一一月三日、長期議会が開かれた。するとトマソンは、この年それまでに出された何冊かの本を既に集めてはいたが、組織的に彼の収集を開始し、ロンドンで出されたあらゆる本、パンフレット、新聞と、他の地方および海外から入手できるかぎり多くのものを、購入もしくは時折寄贈により、取得していった。彼はこの試みを一六六一年四月二三日のチャールズ二世の戴冠式まで中断なしに遂行し続け、彼の収集が一旦終わっても、この年の一二月末まで若

干のパンフレットを追加している。

彼の死後に出された広告［死亡通知の広告であろう］の言葉に誤って導かれたことは疑いないが、今日までトマソンについて書いた人々はすべて、彼を「王党派の書籍商」として描いてきた。

これは完全な間違いだ思う。例えば、本カタログの一六四二年一二月五日のところには、議会軍のための資金調達委員会による通達の手書き文書が見いだされるが、そこにはトマソンと他の二名の名が彼らの教会区（パリッシュ）内の出資申し込み公認募集人として挙げられている。また、一六四六年六月五日のところには、前月二六日にロンドン市（the Municipality of London）から提出された、強い調子で書かれた長老派による請願を支持する、市長および市議会あて請願が見いだされるが、それにはトマソンによる、「作成され、終了。わたしは五日からこの作成と推進両方にかかわった」という記載が付いている。これら二つの文書は、ラヴ陰謀事件へのトマソンの関与、および、当時彼がロンドンの長老派牧師たちに対して持っていると言われていた影響力を一緒に考え合わせると、彼と同じロンドン市民の大半がメンバーとなっていた長老派グループ（the Presbyterian party）にトマソンが属していたことを示す十分な証拠である、と思われる。

長老派としてトマソンは、一六四二年―一六四六年の内戦の間、もちろん議会と議会軍に全面的に共感していた。しかし、一六四七年、一六四八年に権力が議会と長老派から新型軍（New Model Army）の指導者たちの手に移り始めたとき、トマソンは、多くのロンドン市民と共に彼の姿勢を変え、国王との「個人的交渉」（personal treaty）の熱心な唱導者となった。今ここでこのコレクションの歴史的価値や意味について何か全般的なことを述べる余地はない――それは単なる序論で扱うにはあまりに広範で重要なテーマである――が、しかし、「個人的交渉」に言及したついでに、ニューポートでの話し合いの前にも、その最中にも、国王との交渉の成功に対してロンドンの長老派市民が抱いていた期待がどれほど強かったかについて、一六四七年、四八年のトラクトが提供する証拠を指摘しておきたい。スペースさえ許せば、多くの例を挙げるのは容易であろう。しかし、その事実を確認するには、その二年間に出されたトラクトのタ

イトルに目を通すだけで十分である。この事実については、この時期を描くいかなる歴史家によってもこれまで十分な強調がほとんどなされていない。このような希望や期待が、一六四八年一二月六日のプライド粛清（Pride's Purge）によって突然断ち切られたこと――剣がペンよりも強いことを証明した歴史上の多くの例の一つである――は言うまでもない。

トマソン、イタリアから貴重なライブラリーを購入し売却

一六四七年五月二一日、トマソンは、次のような題の印刷されたカタログを出した。すなわち、『ＡＤ一六四七年イタリアから購入した書物のカタログ。ばらの花環のしるしのある、セント・ポール・チャーチヤード近くの、ロンドンの書籍商ジョージ・トマソンにより発売されたもの。ロンドンの印刷業者ジョン・レガット（Johannis Legatt）、一六四七年』（Catalogus Librorum diversis Italiae locis emptorum Anno Domini 1647, a Georgio Thomasono Bibliopola Londinensi apud quem in Caemiterio D. Pauli ad insigne Rosae Coronatae prostant venales. Londini typis Johannis Legatt, 1647）である。このカタログには、初めにラテン語の序文が付いているが、もしこれがトマソン自身によって書かれたのであれば、トマソンは非常に賞賛に値するラテン語学者であったことになる。序文は、以下のような内容である。

「親切な読者よ。これは、神学、医学、言語学あるいは優れた文学に関心を持つすべての人々にとって、もしわたしが間違っていなければ、最も有用な、イタリアから買い求められた書物のカタログである。わたしは貴殿の必要を満たし、貴殿の好奇心を満足させることに努めて、いかなる出費も惜しまなかった。貴殿はここに、これまで収集されたよりも多数のラビ文献と東洋の書物および手書き本を、またそれらに加え

て、教育学や医学の主要な著作家、および数学、歴史、諸言語の主な大家のものを見いだされるであろう。初めに貴殿の注意を促したい点が二つある。すなわち、第一に、イタリアからの本は、この九年間一切わが国には来ておらず、また、このクラスのものは、将来もこちらに来る見込みは全くない。第二に、わたし自身のためにも貴殿のためにも、全リストを読み通すことができるように、主題に関係なくカタログを印刷するのが最善であると考えた。」

このカタログに挙げられた作品は、一六世紀および一七世紀初頭に出版された印刷本、および東洋の言語で記された若干の手書き写本から成っている。合計で一九七〇点の書物と手書き写本があるが、うち一三〇二点はラテン語、二九四点がイタリア語、三六点がスペイン語、六点がスカンジナヴィアの言語、三〇〇点がヘブライ語、手書き写本を含む三二点がアラビア語、コプト語、ペルシャ語、シリア語、トルコ語である。

一六四七年三月――

「決定――議会両院により、以下のように定められた。すなわち、金細工人商工会（Goldsmith's Hall）――そこで《宥恕委員会》（the Committee for Compounding）が会合した――会計から総額五〇〇ポンドがすみやかにジョージ・トマソン氏に支払われるべきこと。そのトマソンが、印刷されたカタログによれば、非常に価値のある東洋諸言語の書物のライブラリーあるいはコレクション――最近イタリアから買い求められた、元々ある学識あるラビのライブラリーだったもの――を購入したことに対し。また、このライブラリーないしコレクションをケンブリッジ大学の公共図書館に寄贈することとする。上記、ジョージ・トマソンの負債返済は、それに従って、先の五〇〇ポンド支払いのため、金細工人商工会の会計係に対し十分な債務履

行となることとする。金細工人商工会に会する委員会に対しては、それにそってこの総額の速やかなる正当な支払いがなされるように配慮するよう特に勧めることとする。わが国がかくも大いなる宝を奪われ、また学問がかくも大いなる奨励に事欠くことがないためである。そこで、この件に配慮するようアントニー・アービー卿（Sir Anthony Irby）を特に任ずることとする。」

「決定――アントニー・アービー卿が本院を代表して、トマソン氏が書籍購入において良き奉仕をし、イタリアから東洋諸言語の何箱もの本をもたらしたことに留意し、これによって同氏が本王国の学問の奨励に情熱を注いだことに対し、本院の謝意を伝えることとする。」

「決定――セルデン氏とライトフット氏が、ケンブリッジ大学が上述の本を所有し、印刷されたカタログに従ってそこで保管されるよう配慮することとする。」

（下院議事録V、五七二）

これに従って、本はケンブリッジに送られた。故ヘンリー・ブラッドショー（Henry Bradshaw）はそれらの本について、「以前はイタリアのラビ、アイザック・プラジ（Isaac Praji）のものだった、ヘブライ語の本のコレクションである。本は運ばれてきて、すぐに利用できるようにされた。これが当方のヘブライ語ライブラリーの基礎となった」と述べている（ブラッドショー『論文集』一八八九年、一九五頁）。

五〇〇ポンドというのは、およそ三〇〇冊のヘブライ語の本代としては、かなりの額だったが、その時期は財政的にひっ迫し、混乱していたから、トマソンは、自分に約束された金を手に入れるのはそう容易なことではなかった。

一六四八年三月三一日宥恕委員会は、その金額を、ニューアーク前にいるスコットランド軍に対する二―四ヶ月分の査定額から支払うことを決議した。

九月二五日グラモーガン州［ウェールズ南東部］カッスル・メネクのハンフリー・マシューズ大佐（Colonel Humphrey Matthews）が、滞納金に対し宥恕を認められ、彼の罰金五〇〇ポンドが、トマソンに支払われるように決議された。一〇月一三日新たな決議がトマソンのためになされたが、これは先の二つの決議同様何の実りもなかったように思われる。最後に一一月一六日、未払いの元額に対し八パーセントの利息が彼に与えられた（『宥恕委員会記録』一三三、八〇七、八〇九頁。一八五六年）。

同委員会記録にこれ以上の記載がないところを見ると、トマソンが自分の金を受け取ったか、それとも八パーセントの利息で満足していたか、のいずれかであったと考えられる。

チャールズ一世とトマソンのコレクション

一六四七年の晩秋、国王チャールズ一世が泥の中に落とした本の見返しにトマソンが次のように記録している、一つの出来事が起こった。このメモは、王政復古後に書かれたことが見て取れる。

「メモ。ウィル・レッグ大佐（Col. Will Legg）とアーサー・トレヴァー氏（Mr. Arthur Treavor）がチャールズ国王陛下により、陛下が当時使用したいと考えたあるパンフレットを、彼の目下の使用のために入手すべく登用されたが、彼らはそれを見いだせず、わたしがその議会当初からそうしたものをすべて集めることに努めてきたことを聞いて二人でわたしのところにやってきて、それをわたしのところで見つけ、わたしに、それは国王が自ら使用するためであると告げた。それでわたしは彼らに、わたしが持っているものはすべて陛下の命ずるまま奉仕に役立たせるつもりであるが、それにもかからわず、もし万一わたしがそれを手

離して失ってしまったら――陛下がそれを処分してしまわれて、それに小さな額が支払われると仮定してだが――、それによってわたしはわたしのコレクションの一つの枝を失うことになり、一旦失くなるようなことがあれば、それを補充することは不可能だとよく知っているので、そういうことはどうしてもしたくない、と彼らに告げた。彼らはその答えを、ハンプトンコートの陛下のもとに持ち帰り（わたしの理解するところでは）、陛下に、彼が非常に欲しがっていたものを見つけたが、その所有者がそれが失くなるのを大変恐れてそれを手離すのをどれほどいやがっているか告げた。そこで彼らは二人とも、陛下により再びわたしのところに遣わされてきた。王の言葉にかけて（彼ら自身の言い方を用いると）、陛下はそれを無事に戻す、とわたしに告げるためである。そこでわたしは直ちに、彼らによりそれを陛下のもとに送った。陛下はそれを用いたあと、ワイト島に向けて出かけるとき（一六四七・一一・一一―一三）それを持っていって、泥の中に落としてしまった。それで上記の二人（彼に同行していた）を呼びにやり、彼らに、後日そう答えるよう、次の命令と共にその本を彼らに渡した。すなわち、両者が速やか、かつ無事にそれを彼らがそれを受け取った者に返すように、その上で、相手に、始めたことを継続し、続けるよう要望するよう、という趣旨である。これらの立派で忠実な紳士たちにより、わたしに宛てた陛下の通知と共にこの本をわたしは速やかに、かつ無事に受け取った。

この本にはその上で栄誉の印がついているが、わたしのコレクションでそれがある本は他にない。わたしは、神が長い間守りたもう、いとも仁慈深きチャールズ二世国王陛下の最も幸いなる王政復古と戴冠まで、このコレクションを非常に熱心かつ注意深く続けた。ジョ・トマソン（Geo. Thomason）。」

このようにして栄誉を与えられた巻には一四のトラクトが入っているが、そのうち一二は説教と新聞、あるいは風刺

のパンフレットである。チャールズ一世が見たいと思ったトラクトは、次の二つのうちのいずれかではないかと考えられる。

- 『陛下から提案された停戦箇条（the Articles of Cessation）の変更と追加に同意できない、上下両院の理由。それに対する陛下の仁慈深き回答を付けて』（一六四三・四・四）
- 『陛下と議会の間の現在の和平交渉に関する宣言』（一六四三・四・七）

市会議員トマソン

一六四七年と一六四八年に集められたトラクトには、トマソンがこの期間ロンドン市の市議会議員として働いたことを示す十分な証拠がある。一六四七年六月二四日、長老派側の匿名のパンフレットに、著者からトマソンに宛てた、それを市議会の会合中に提出するか朗読するよう彼に頼む、印刷された手紙が付いている（I・五二三）。一六四八年四月八日、市議会の会合に出席するようにとの召集状が、「セント・ポールズ・チャーチヤードのトマソン氏に」宛てられており、五月二〇日には、ロンドン市民軍委員会（the Committee of the Militia of London）の通達が、「市議会員、ジョージ・トマソン氏」に宛てられている（I・六〇七、六二三）。

残念ながら、内戦あるいは共和政期間の市議会議員の、印刷もしくは手書きのリストが現存しないので、彼がどの区（ward）から選出されたのかは分からない。しかしながら、彼が、一六四八年に市議会の多数派を構成した他の長老派議員たちと共に、一六四八年一二月二〇日（プライド粛清の二週間後）に通された、国王との個人的交渉にかかわる約定や請願に名を連ねた者全員をロンドン市のいかなる役職にも選出することを禁じる議会条例により、排除されたこと

は確かである。

ラヴ陰謀事件とトマソンの逮捕、釈放

一六五一年四月トマソンは、いわゆる《ラブ陰謀事件》にかかわったという嫌疑で逮捕され、ホワイトホールに投獄された。多くの長老派のジェントルマン、ロンドン市民、牧師がこの謀議にかかわったが、その主な目的は、契約を支持する君主（a Covenanting Monarch）としてチャールズ二世を復位させるのにスコットランド人を取り込むことと、イングランドに長老主義を確実に樹立することであった。トマソンを訴えた証言は、一六二五―一六三八年国務大臣を務めたジョン・クック卿（Sir John Coke）の下の息子、ドレイトンのトマス・クック（Thomas Coke of Drayton）の自白と尋問によるものだった。何年間か王党派の工作員として活動していたクックは、一六五一年三月二〇日の条例により、四日以内に降伏しなければ私権剥奪相当の反逆者となると宣告された。彼は、何日間か逮捕を免れていたが、三月二九日収監された。命拾いするため彼は、国務会議に情報を提供し、全国の謀議指導者と、謀議に参加したロンドンの商人、職人（tradesman）、牧師全員の名簿を差し出した。クックの自白内容は、『歴史的手書き文書委員会第一三報告』（Thirteenth Report of the Historical Manuscripts Commission, MMS. at Welbeck, Vol. I. pp.576-604）に印刷されている。クックの証言によると、トマソンは、チャールズ二世がブレダから書いた手紙をロンドンの長老派牧師たちに届けるのに指導的な役割を果たしていたという。更にクックは、ロッテルダムで市会議員バンス（Bunce）から次のように聞かされたと断言した。すなわち、「彼［バンス］は、ロンドン市では、そこで事を運ぶのに、トマゾン（Thomazon）とポッター（Potter）（元、士官で、当時ブラックフライアズで薬剤師）以外にだれかほかの人を求める必要はない。というのは、彼らは市民の大半の気持ちを知っているから」ということだった、と。国務会議から議会に宛てた書簡には、

「トマス・クック氏の情報は、ただ彼の情報に基づいて発覚し拘束されたポッター大尉（Captain Potter）とトマスイン氏（Mr. Thomasin）訴追に用いられた」と述べられている。

トマソンの逮捕と釈放の経緯については、『宥恕委員会議事録』二六七九頁、および『国事録』（the Calendar of State papers, Domestic）一六五一年の、二一八、二一九、二三〇の各頁に以下の記載がある。

一六五一年四月一一日、宥恕委員会「ロンドン地方（カウンティ）委員会は、トマソンの財産は不動産も動産も両方とも差し押え、目録を作り、保全することと決定」

五月二七日、国務会議「なされた尋問の真実性について誓約させたのち、通常の条件通り、二名の保証人がそれぞれ五〇〇ポンド、計一〇〇〇ポンドの補償契約に基づき、トマソン氏を保釈すること」

六月二日、宥恕委員会「国務会議は、その様子とよき行動を信頼し、宥恕委員会に対し、さきに命じられていたその抑制を解除するよう要請した。」

六月三日、宥恕委員会「抑制を解除し、地方委員会による補償契約書を彼に届けること」

六月一四日、国務会議「会議はロンドンの書籍商ジョージ・トマソン氏の様子とよき行動を信頼して、彼の財産を保全するよう会議が命じた時点と同じ状況に彼を戻すこと、また、彼には、それを享受することが許されることが適当であると考える。但し、今後いかなる手紙、およびそれについての情報も没収委員会（the Committee for Sequestration）に提示すること、とする声明。」

トマソンは、クリストファー・ラブに対する起訴に含まれず、一六五一年六月と七月に行われたラブの裁判で証人として呼び出されることもなかった。ラブに向けられたさまざまな訴因の重大な性質を考えると、トマソンが何週間かの

投獄と不愉快な取調べと捜査だけで済んだのは幸運だった。実際は、非常に多くの重要で名の知れた長老派の人々がかかわっていたため、恐らく国務会議は、ラブと、ラブの主な共謀者で、大体はイングランドからまんまと逃亡していた人々のうち若干の者だけに起訴を限るのが賢明だと考えたのであろう。

確かな情報は得られないが、わたしとしては、トマソンが当時あった限りの彼のコレクション全部をボドリアン図書館のバーロー博士（Dr. Barlow）のもとに送り、以下にかかげる「広告」（Advertisement）に述べられている文書［後出二二一頁］を彼からもらったのは、ラブ陰謀事件（the Love Conspiracy）事件の間、多分クック逮捕を聞いた直後だった可能性が極めて高いと思う。その書類は、実際に売却が行われ、かくしてトマソンの宝の没収を防ぐことができたことを証明するのに持ち出せるだろう。それ以前何年間かトマソンがオクスフォードに本を送る習慣だった事実が、トマソンのコレクションをこのような方法で確保するのをしやすくしたのは勿論である。多分、トマソンは、残りの本もいろいろなときにオクスフォードに送ったと思われる。

トマソン、収集を継続

いずれにしても、トマソンの投獄が彼のコレクションの進行を一切妨げなかったことに留意するのは興味深い。一六五一年の四、五、六月の間、新聞やパンフレットの数は減っておらず、パンフレットにはトマソン自身により規則的に日付が入れられている。

一六五六年一二月一一日、当時最も重要な書籍商の一人だったロバート・ボストック（Robert Bostock）が死に、その五七に及ぶ著作権がトマソンに移譲された。

トマソンが彼の本にしばしば注釈を付けているメモは、彼自身の人柄や身辺の事情に触れることはほとんどない。こ

こに掲げる四つだけが、自伝的と言えるものである。

一六五七年二月七日、彼はあるパンフレットの表紙見返しページに、「わたしの悲しい事故の日」と記している。

一六五八年三月二四日、彼は余白ページにこう記している。

「本日わたしは、わたしの苦心して作り上げたコレクションをやめることにした。数が非常に少なく、取るに足りないものとなり、もはやわたしの労に値せず、明日始まる一六五八年、わたしは自分の大いなる労苦と負担に終止符を打つことをむしろよしとしたからである。」

幸いにもトマソンは、彼の絶望的な決意を悔い改めて、以前と同じ位かそれに近く、注意深く、収集を継続した。

クロムウェルの支配下で無許可出版を取り締まる諸法律がより効果的に適用されたこともあって、トマソンがその頃、出されるパンフレットが「少なく、取るに足りない」と考えたのは正しい判断だった。しかし、クロムウェル死後の無秩序と期待が入り交じった何年か、パンフレットの量は急激に増加し、一六五九年と一六六〇年は、コレクション全体の中で最大の分量で、最も興味深い時期となっている。

第二巻二二一頁に、トマソンが「アテネの三〇人の専制君主にかかわること。イングランドの主な裏切り者と専制君主、幾人かの名を付したもの」と書き込んだ手書き文書がある。この手書き文書は、ローリー（Raleigh）の『世界史』からの抜き書きで成っているが、その抜き書きに、「国王殺し」（Regicides）の名簿と、次のように書いてあるメモが付いている。すなわち、「わたしは、わたしが作ったこれらの付録の文章と一緒に、この名簿を出版したいと切に願っていたが、当時敢えてやってくれる印刷屋がいなかった。一六五八年、ジョ・トマソン」である。このメモも王政復古後に元々のテキストに追加されたことが見て取れるであろう。

一六五九年に出されたパンフレットの中に、トマソンが一〇月二九日の日付を打った『六つの新しい問い』と題する片面刷り（broadside）があるが、それにはトマソンが書き込んだ「N.B.G.T.」というメモが付いている。これは多分、軍を鎮圧し、新しい議会を選ぶ自由な選挙を実施するよう熱心に願う長老主義者か、もしくは穏健な王党派の人の意見を簡潔に表明するこれらの問いの作者が、トマソン自身だということではないか、と思う。第一問は、他の五つの問いの内容を要約するものと考えられるが、「軍が国家において同時に権力を握っているとき、イングランドの理性ある人は、議会から何らかの善を期待できるか否か、あるいは期待してよいか否か」となっている。

トマソンの遺言書と遺言補足書

一六六四年一一月二一日、トマソンは自分の遺言書に署名した。妻キャサリンはすでに先立っていて、一六四六年一二月一二日ウェストのセント・ダンスタン教会の南通路（アイル）に埋葬された。トマソンは娘エリザベスも亡くしたが、当時ジュアリーのセント・ローレンス教会牧師で、王政復古後ノリッジ主教になったエドワード・レノルズ（Edward Reynolds）による彼女の葬儀説教は、コレクションの一六五九年四月一一日のところにある。

トマソンが遺言書を書いたとき、彼には生存している六人の子供がいた。長男ジョージは、一六五五年オクスフォードのクィーンズ・カレッジを卒業し、その後任職されて、一六八三年リンカーンの主教座聖堂名誉参事会員（プリベンダリー）となり、一七一二年死去した。長女キャサリンは、ウィリアム・ストーンストリートに嫁いだ。トマソンは、この長男と長女には、彼らはそれぞれ結婚したとき彼の財産から「相当で十二分な分」をもらったからと説明して、ごくわずかの遺産を遺しただけである。

年下の四人の子供たち、エドワード、グレイス、ヘンリー（この子が父の商売を継ぎ、何年間か〝ばらと王冠〟で商

売を続けた)、トマス、に対してトマソンは、財産の大半を彼らの間で等分にわけるように遺した。娘のグレイスには、財産の分け前に加えて、彼女が結婚したら一二ヶ月以内に与えるようにと、六〇〇ポンドを遺した。トマソンは、使用人や書籍商組合、小間物商(haberdashers)組合にも数多く遺産分けをし、セント・ポールズとセント・ダンスタン教会での[葬儀]説教に対する遺贈も残した。遺言執行人としてトマソンは、息子のヘンリーと義理の息子、ウィリアム・ストーンストーリートを指名した。

最後に、彼のパンフレットのコレクションをトマソンは、次のように処理することにした。

「わたしは、一六四〇年一一月三日に始まり、最も、仁慈深き国王陛下チャールズ二世の幸いなる帰還と戴冠まで続いた、先の戦争の時代にわたしが集めたパンフレットと他の文書、およびそれらと一緒に綴じた何巻にもなる文書のコレクションを所有しているが、このコレクションは類例のない完璧なものであるだけでなく、収集に当っては膨大な時間と労苦、努力、費用が費やされたことを思い、わたしはこれをこの上なく高く評価している。それでわたしはこのパンフレット類のコレクションを、心から尊敬する友人たち、すなわち、神学博士で現在オクスフォード大学クィーンズ・カレッジ学長のトマス・バーロー(Thomas Barlowe 1652.4-1660.9 ボドリアン図書館の館長)と、神学博士で、オクスフォード公立図書館長のトマス・ロッキー(Thomas Lockey、館長職にあたったのは1660.9-1665.11)、およびリンカーンズ・イン[法学院]のジョン・ラッシュワース(John Rushworth)、に委ねる。これは、三人の息子、エドワード、ヘンリー、トマスの使用と益となるよう、彼らに売却してもらい、それを三人の息子に全く平等に分けてもらうよう信託するものである。」

この遺言書の調子全体は、繁栄している裕福な商売人のそれだが、それに付されている二つの遺言補足書は、遺言が有効となって何ヶ月も経たないうちにトマソンが、自分の金銭上の立場について、特に彼のコレクションの売却に関して、ひどく不安をつのらせていたことを明らかにする。

第一の遺言補足書は一六六五年一月二〇日の日付だが、そこにトマソンはこう記している。

「万一財産が不足する場合、最近作成したわたしの遺言書に従ってわたしの死後に財産がどのように分けられるか、今分からないので、その場合わたしは、いとしい二人の子供たち、娘グレイス・トマソンと、息子トマス・トマソンに、わたしのパンフレットのコレクションを売って得られるお金の金額を、彼らの生活向上のため二人の間で平等に分けるよう、与えることにする。そのコレクションはトマス・バーロー博士の手にあるが……彼は現在わたしとそれを公立図書館に売却することで交渉中で、近いうちにまとまると思うが、まとまった場合わたしは、良き友人であるマッシュ・グッドフェロー氏（Mr. Matt. Goodfellow）に、彼の使用人であるわたしの息子のために補佐役になってもらいたいとお願いするつもりである。わたしは必ずそうしてもらえると確信している。」

第二の遺言補足書は一六六五年五月二二日の日付で、一段と希望が持てない調子で書かれている。

「いとしい娘グレイスに遺贈する六〇〇ポンドについては、もしその慣例上の額があいにく不足する場合には、パンフレットを売却したお金の中からその額を払うようにしてよい。そして、このパンフレットの売却金から同額の六〇〇ポンドを、わたしはいとしい息子トマスに遺贈し……その残りを息子ヘンリーとその

兄弟エドワードに遺贈する。」

トマソンの死と埋葬

その生涯の大半の出来事と同様、トマソンの死亡の正確な日付は、確かでない。遺言の中で彼は、ウェストのセント・ダンスタン教会の中の、妻キャサリン・トマソンの墓にできるだけ近い所に埋葬してもらいたいと指示している。同教会の埋葬記録簿に、次の二つの記載がある。すなわち、「一六四六年一二月一二日、ジョージ・トムソンの妻キャサリン・トマスン夫人、教会（に）埋葬」、「一六六六年二月一三日、書籍商ジョージ・トムソンが上部（Upper）教会墓地（N.S.）に埋葬された」である。

確かに、チャンスリー・レイン（Chancery Lane）の白馬（ホワイト・ホース）の看板がある店に、ジョージ・トムソン（George Thompson）という名の本屋がいた。しかしこの記載が言及しているのがその人のことだというのは、まずありそうにないと思われる。トムソンという名の綴りは、キャサリン・トマソンの夫について述べているところ、および、その後の方の記載のところで、同一であるのが見て取れるだろう。もし次のものがなければ、ジョージ・トマソンが、一六六六年二月一三日に埋葬されたことを疑う余地は、実際にはありえないだろう。ところが、『リチャード・スマイス（Richard Smyth）の死者略歴、すなわち、一六二七年から一六七四年までのスマイス氏が知っている人々全員のカタログ』（スローン写本 八八六、カムデン協会のために編集された、一八四九年）の中に、次の一節が出ているのである。「一六六六年四月一〇日、書籍商ジョ・トマソン（Geo. Thomason）が、印刷出版会館（Stationers Hall）の外に埋葬された（貧乏人）」。

リチャード・スマイスは高価本の収集家としてよく知られている人物で、恐らくトマソンと取り引きがあったと思わ

れる。スミスの叙述は全面的に信憑性のあるもので、トマソンの貧しさへの言及は、トマソンの遺言書への補足書で表明されている恐れに一致する。印刷出版組合書記のC・R・リヴィングトン氏（C. R. Rivington）は、親切にもこの問題に大変関心を示してくださり、わたしに次のように語った。すなわち、一六六六年の法廷記録はロンドン大火で消失し、印刷出版会館により頻繁に執り行われた葬儀について記載がなされた別個の記録簿は存在せず、また、一六六五年から一六六七年には組合長会計簿（The Wardens' Accounts）に葬儀費用への言及は一切ない、ということである。遺言検認記録簿（the Probate Registers）からわたしは、トマソンの遺言書が一六六六年四月二七日に検認されたことを知っている。かくして、トマソンの死亡の年については疑問は全くないが、正確な日時はなお未解決のままである。

コレクション、オクスフォードからサミュエル・マーンの手に

パンフレット類はオクスフォードで、バーローとその共同管財人の管理下にあり、そのため、一六六六年九月のロンドン大火で消失するのを免れた。一六七五年六月二七日バーローはリンカーン主教に叙任され、翌年オクスフォードを離れるとき、息子のジョージ・トマソンに宛てて次の手紙を書いた。息子トマソンは、弟たちに遺贈されていたコレクションの売却にあまり興味がなかった。この手紙は最初、ベロー（Beloe）の『文学逸話』（Anecdotes of Literature, 1807）の第二巻二五一―五二頁に、次いで、若干変更を加えたものが『記録と問い』（Notes and Queries, 1857）第二集、第四巻四一三頁に印刷されて載った。

一六七六年二月六日　オクスフォードから

敬愛するわが友よ、わたしは間もなくオクスフォード（わがいとしき母）と、長くわたしの手にあった、

あの素晴らしく、また高価な、書物のコレクションに別れを告げます。そこであなたに、それらの本をどこかに運ぶか、それとも、わたしの後任に、あなたが別の形で都合よくそれらを処分できるようになるまで、そこに［オクスフォード］そのままにしておくよう話すか、していただきたい。もし、わたしに自由になる金があれば、わたしがあなたからそれらの本を求めるつもりはありますが、しかしコレクションは膨大で、わたしの財布はまことに小さいので、とても手に入れることはできません。これは書物の多さ、それらがまとめられている正確な方法、いずれから言っても、あなた以外には、だれも持っていない、また、持てる可能性のないコレクションです。もし、それが、学識のある、まじめな人々が手にし、利用できる安全な保管場所に納められれば、そのコレクションを利用することは、公共のために（教会と国家、両方の）非常に益になるでありましょう。コレクションに最適の場所は（利用と格の点で）、王立図書館館か、トマス・ボドリー卿図書館、もしくは、どこかの公立図書館です。なぜなら、そういう所であれば、コレクションは一番安全ですし、利用できるからです。わたしはこれまで長い間、ボドリー図書館のために、そのコレクションを獲得する方法を見つけようと後援者たちと努力してきました。あきらめたわけではありませんが、そのような道が見つかるまでにはかなり時間がかかるでしょう。

あなたの親愛なる友にして兄弟

トマス・リンカーン

この手紙の日付の直後コレクションがどうなったかについて、正確な記録は存在しない。恐らく本はロンドンに戻されたと思われ、間もなくして、チャールズ二世の印刷出版業組合長に就いていた有名な製本業者、サミュエル・マーン（Samuel Mearne）の手に移ったことは確かである。後段に掲載するマーンの未亡人による請願は、国王によるコレク

ション購入のために、マーンと、国務卿で、何年間か、ホワイトホールの王立図書館長をしたジョゼフ・ウィリアムソン卿（Sir Joseph Williamson）との間で何度も交渉がなされたことを示している。しかし、コレクションが売りに出されたときの条件や、コレクションの処分がうまくいかなかった原因については、何も分からない。現在図書館［王立図書館？］に保存されている、印刷された広告がマーンによって出されたことには、ほとんど疑問の余地がない。それにはこう記されている。

「一六四〇年に、今や追慕の情つのる国王チャールズ一世の特別な命令によって開始され、幸いなる統治復古と国王チャールズ二世の戴冠まで継続された、本とパンフレットの完全なコレクション。

「一六四〇年一一月に始まったあの長期・反逆議会の開始から、先帝の幸いなる復古と戴冠までに出版された全パンフレットの正確なコレクション――三万点近い、あらゆる党派から出されたもの――を作るのには、非常に多額の費用が費やされ、多大な労がとられ、多くの危険が犯された。

「このコレクションは、世界に類はなく、また作ろうとしても不可能であるから、現代でも後の時代でも、公共のこと（Public Affairs）にかかわるいかなるジェントルマンにとっても、極めて有用であろう。

「コレクションは、あたかも一度になされたように、すべて同じ形式で綴じられ、また、すべて正確に区分され、番号を付けられた、約二〇〇〇巻を含む。

「採られている方法は、時間順で、パンフレットが出されたその日付けが大半のパンフレットの上に記されてある通りに、非常に几帳面な注意が払われた。

「それらのパンフレットのきちんと記されたカタログは、二つ折判（フォリオ）で一二巻である。パンフレットの数は非常に大きいがそれらの本は、その一つ一つに付けられたマークに従って整理されている。ただ一枚の紙にす

ぎない最も小さいパンフレットも、そのカタログに載せられているため、たちまち見つけることができる。この方法は、読む人にとってはこの上なく便利である。

「中には、印刷されなかった一〇〇近い手書き文書が含まれている。それらの全部もしくはほとんどは、国王のためのもので、当時はだれも、身の破滅の危険を犯してまで、敢えてそれらを出版しようとはしなかった。しかし、今丹念に読む人は、それらにより、これまで気づかれていない、当時の多くの出来事について知ることができるであろう。

「このコレクションは全く個人的になされていたので、このような計画が進められていることは決して知られていなかった。収集者は、これらをただ当時の国王陛下の用に供するために企図していたのである。陛下はあるとき、一つのパンフレットを探し求めておられ、他のどこでも見ることができなかったが、彼のところでだけ見ることができた。陛下はそれを丹念に読まれ、その企図にいたく喜ばれ、一人の高官をしてその手でそのパンフレットを返却することを命じた上、そのコレクションを継続してもらいたいとの自らの願いを表明された。これは、コレクションを試みていた者にとって、大きな励ましであった。このようなことがなければ、二〇年以上にわたり、彼自身と彼の使用人たちに重い負担となっていた、非常に困難かつ費用の要る仕事を遂行するのを断念していた。

「軍が北部にいたとき、それらが発見されるのを防ぐため、彼は幾つかのトランクにそれらを詰め、週に一、二個、サリー州の信頼できる友人のところに送り、その人がそれらを安全に保管してくれた。軍が西部にいたときには、サリー州の方に戻って来るのを恐れて、コレクションは再びロンドンに送られた。しかし、コレクターは、敢えてそれらを自分のところに置こうとはせず、エセックス州に送り、かくして、コレクションが危険に近くなったとき、それでもなお、莫大な費用をかけ、時宜を得て移動させてコレクションを確保

したが、その仕事をやりとげることは継続した。

「そしてコレクションにとって一層安全となるよう、オックスフォード大学と取り引きがなされたことにされた。一〇〇〇ポンドの領収書が出され、それは代金の一部とされた。そして、もし王位簒奪者がコレクションを見つけ出したら、大学は、それは大学のものだと主張することになった。一人の私人よりも、大学は、コレクションのために戦う、より大きな力を持っていたからである。

「コレクションが横取りされ、破壊されるのを防ぐために、こうしたあらゆる手がうたれ、さまざまな困難が対処された。加えて、この事業者は、収集と収集したものをまとめるための莫大な費用に多額の出費をしたため、在世中は、本代として四〇〇〇ポンド提供されても、その額では自分に償還するには不十分として、断ったのであった。」

この広告は、一八五七年、『記録と問い』(Notes and Queries) 第二集、Ⅳ巻四一二—四一三頁に全文印刷された「彼のコレクションについてのトマソン氏のノート」と題された、トマソン・カタログ第1巻に以前付されていた手書き文書の、縮小・訂正版である。これは、父ジョージ・トマソンによって書かれたはずはない。なぜなら、それにはトマソンの死の一〇年後の日付があるバーロー主教 (Bishop Barlow) の手紙のコピーが含まれているからである。これはマーンか、もしくは、父が残したnotesの上に手紙を基づけたかもしれない、トマソンの息子たちに帰されねばならない。手書き文書はさきの広告より幾分長いが、そこに含まれていて、印刷された文書に載せられていない唯一のところは、以下の段落から成っている。

「陛下はこの企図をいたく喜ばれたが、これはコレクションを試みていた者にとって大きな励ましとなった。

彼が思うに、さもなければ、彼自身にとっても、その仕事にたずさわった彼の使用人たちにとっても、非常に金がかかり、大きな負担となることを体験から彼が見いだした、かくも困難な仕事をやり続けようとはしなかったであろう。この仕事は二〇年以上続き、その期間に彼は、彼と共にその単調で退屈な業務に日夜多大な労苦をした人々のうち三人を埋葬した。そして彼は、軍が北部にいたときは、コレクションが発見されるのを防ぐため、幾つかのトランクにそれらを詰め、週に一、二個をサリー州の信頼できる友人のところに送り、その人がそれらを安全に保管してくれた。しかし、軍が西部にいたときは、そちらの方に戻ってくるのを恐れて、やむなく本を再び送り返してもらわねばならなくなり、そこから無事それらを受け取った。しかし、危険が非常に大きかったので、あえて自分のところにおいて置こうとはせず、再び荷造ってコレクションをエセックス州に送った。そして軍がそちらに向かいトリプルヒース[一六四七年六月トリプル・ヒースにおける会戦]に行ったとき、彼はそちらからそれらを送り返してもらわねばならなかった。そして、イングランドのどこでもコレクションは安全ではないと考え、ついに、もっと安全に保管してもらうためオランダに送る決意をした。しかし、そのコレクションがどれほどの宝かをよくよく考えた末、思い直して、あえて海上輸送の危険を犯すのはやめ、自分の倉庫に入れ、壁布(カンバス)でおおわれた幾つかの部屋にテーブルの形で置き、収集は中断せずになお継続することに決めた。ところがそれでも、簒奪者の権力と命令によりベッドから連れ出され、ホワイトホールで、まるきり囚人として七週間余[一六五一年四月、五月]閉じ込められたとき、彼は、その日――神のお蔭で今や現実に来ている――が来ることをなお望み見ながら、それまでたずさわっていたその比類なき働き、責任、労苦に終止非を打ったのであった。」

トマソンがコレクションの代金として四〇〇〇ポンドを受け取るのを拒否したと述べられている、印刷された広告の

方の最後のパラグラフは、手書き文書の方には見いだされない。そのような言明は信ずるのが難しいということは、ほとんど言うまでもない。明らかにトマソンは、最後の日々は、金銭的に困窮しており、現在の値段に換算して確実に一万六千ポンドになる金額を拒絶したなどということはありそうにもない。また、たとえどれほど完璧でよく整理されていたにしろ、ほとんど同時代のパンフレットや新聞のコレクションに、どんな図書館やコレクターであれ、それほどの金額を申し出たとは容易に想像できない。

この時期としては、特に、著者の主な目的が国王チャールズ二世にコレクションを売りつけることだったとすると、最も自然だと考えられるのは、この点および、それ以外の興味深い幾つかの主張をその広告に盛り込むことであろう。著者が、自分が書いている内容を信じていたというのは、極めてありうる。いずれにしろ、トマソンが国王のために、かつ国王の直接的な命の下に行動し、また、軍の暴力と「簒奪者」の復讐や強欲による、考えられるあらゆる危険をものともせず、ひとえに「国王陛下の用に供するために」彼のコレクションを形成してきた、と装うことは、高度に政治的だった。しかし、事実、一六四七年秋にチャールズ一世に貸し出された本についてのトマソンの疑いなく純粋な注記は、国王［チャールズ一世］がその時トマソンのコレクションについて初めて聞いたことを証明する。また、なぜトマソンが彼のコレクションをいろいろな方面に送ったり、ロンドンであれほど細心の工夫をこらして隠す必要があると考えたのかを理解することも容易ではない。仲間の長老派の人々と共通してトマソンは、明らかに、クロムウェルおよび独立派軍のいかなる悪も直ぐに信じたが、しかし内戦史上、軍の士官や兵士が書籍商の在庫品をめちゃめちゃにしてうかれたなどという考えを正当化するものは何もない。反対に、クロムウェルは、一つのライブラリーを意図的に没収したり破壊するより、むしろ、そのコレクションを購入し、コレクターをほめる見込みがあった。※（脚注）

※xviiの脚注

それから何年か後、クロムウェルと軍の士官たち両方が、書物に対する彼らの敬意を見事な仕方で表わした一

つの出来事が起こった。一六五六年大主教アッシャーの死後、そのライブラリーが売却されることになった。デンマークの枢機卿マザラン（Mazarin）と国王フレデリック三世の両者が値をつけたが、クロムウェルは、かくも素晴らしいライブラリーが海外に行くのを許すことを断固拒み、コレクションは二二〇〇ポンドで購入されてダブリン城に預けられた。その金額は寄付金で集められたが、その大半はアイルランドに在った軍の士官と兵士たちから献金された。

広告にうたわれている、トマソンの本の放浪についての話は、高度にそれが書かれた時の事情によるもので、わたしとしては、この物語は一六四五年から一六四七年頃よりももっと後の時期について言及している可能性があるのではないかと考えている。トマソンは、ラヴ陰謀事件［一六五〇―五一年］に連座した結果本当に危険になり、コレクションをオクスフォードに送り、バーローの配慮の下に置く、という案を最終的に採用する以前、コレクションを分散させたり、隠すことによってそれを救うことに努力した、ということかもしれない。

更にまた、印刷されたものと一緒にされている手書き文書が、「当時だれもあえて出版しなかった」王党派の文書である、というのも真実ではない。わたしは以下にそれらを叙述するが、ここではただこの点だけ記しておきたい。すなわち、あのように大量に印刷され、ある程度は出回ったに違いないパンフレットや新聞よりも、もっとずばずば言い、もっと大胆で、あるいは、時にはもっと罵倒するようなものは、考えることも難しいということである。

コレクション、アン・マーンからシッソン家を経てビュート伯へ

一六八三年サミュエル・マーンが死去した。彼は遺言によって、トマソン・コレクションを含む自分の本の在庫を、

彼の未亡人、アン・マーンに遺贈した。一六八四年五月一五日、枢密院（Privy Council）は、ベローの『逸話』第二巻二五三頁、および『記録と問い』（一八五七）、第二集、第四巻四一三頁に印刷されている《指令》（Order）を出した。その《指令》は以下の通りである。

ホワイトホール宮にて
一六八四年五月一五日

国王陛下ならびに最も尊き陛下の貴族院議員とから成る
枢密院

最近死去した、陛下の印刷出版業組合長サミュエル・マーンの未亡人、アン・マーンの謙虚なる請願が、本日会議の席で朗読された。請願によれば、陛下は、国務卿（the Secretary of State）ジョゼフ・ウィリアムソン卿を通じて請願者の夫に、国事に関する種々の本のコレクション、その冊数三万余で、統一した形式で二〇〇〇巻以上にまとまられているもの、を購入することを命じることをよしとされた。請願者の夫は、それらの本を購入するため多大な費用を費し、しかもその本がかくも長期にわたり取り扱いが決まらまいままであることから来る未亡人自身とその家族の負担のゆえ、彼女自身と家族を支援する資金を得る容易な方法として、その本のコレクションを処分することを陛下にお許しいただきたく、慎んで願い上げる、ということであった。会議において陛下は、請願者がよいと思うように本を売却し、処分してもよいとの許可を与えることを恵み深くもよしとされた。

Phi. ロイド (Lloyd)

コレクションは、アン・マーンから、順次、義理の息子トマス・シッソン（Thomas Sisson）、次に、彼の息子で、ラドゲイト・ヒルで薬剤師をしていたヘンリー・シッソンに、そして更に、ヘンリーの娘で、オーモンド街に住んでいたミス・シッソンへと渡っていった。

コレクションは売れないままだったが、その存在がすっかり忘れられてしまったことは一度もなく、シッソン家の人々は、何とかして売却しようと繰り返し努力した。一七〇八年『月刊愛好家専門誌』（第Ⅱ巻、一六七―一八二頁）に、ジョン・バグフォード（John Bagford）が書いた「ロンドン図書館物語」が載った。その中で、バグフォードは、コレクションを「トムリンソン氏」の仕事と述べている（これは、遅くは一八一二年のニコルス『文学逸話』（Literary Anecdotes）にまで繰り返される間違いである）。バグフォードは、トマソンによって語られた出来事についての伝説的な話を次のように記している。すなわち、「チャールズ一世は、一つの小さなトラクトを捜し求めていたところ、徹底した調査の結果、それがこのコレクションの中にあるとついに知らされた。そこで国王は、ポールズ・チャーチヤードのトマソンの家に馬車で行き、そこでそのトラクトを読み、それからトマソンを励ますため彼に一〇ポンドを与えた」と。同じ記事は、一二巻のカタログを一七世紀後半の競売人、マーマデューク・フォスター（Marmaduke Foster）のものとしている。バグフォードの注記を継続・拡大したウィリアム・オルディス（William Oldys）は、こう付け加えている。「わたしが聞いているところでは、現在の所有者には、これまでのところ、それに対して三〇〇ないし四〇〇［ポンド］以上は申し出がなく、申し出をしたのはチャンドス侯（Duke of Chandos）である。」

［脚注――ここで言及されているのは、一七二〇年から一七四四年に、キャノンズに巨大な図書館を建設することを計画していた初代、チャンドス侯である。］

一七〇九年一二月三日、後にケンブリッジ大学セント・ジョンズ・カレッジ学長となったロバート・ジェンキン（Robert Jenkin）は、自著『セント・ジョンズ・カレッジ史』に用いる資料について同カレッジのトマス・ベイカー（Thomas Baker）に手紙を書き、こう言っている。「当地［ロンドン］には、わが卿［初代ウェイマス子爵］に購入が持ちかけられている、もう一つの売りに出されている、めったにないものがあります。それは、二〇〇八巻にまとめられた三万点のパンフレットの完全なコレクションです。このコレクションは、一六四〇年国王チャールズの命で始められ、一六六〇年まで続いています。」（『コール・コレクション』第三〇巻、Add. MSS. 5831, fol. 120）

一七六一年一〇月、コレクションは、文学・芸術の裕福な「パトロン」であるトマス・ホリス（Thomas Hollis）の知るところとなった。ホリスは、同時代の人々には「共和主義者ホリス」として一般に知られた人物であり、また、「彼は、かつて存在したことがないほど実につまらぬ、ひどい奴だが、自分自身の原則と全く反対の原則の持ち主だと知っている人物に対して害を及ぼすことはなかった、と信ずる」という、ジョンソン［博士］の簡潔な人物評で恐らく最もよく覚えられている人物である。

ブラックバーン（Blackburne）の『トマス・ホリスの思いで』（一七八〇年）の次の文章は、ホリスがコレクションについて知るに至った状況について述べてはいるが、果たしてホリス自身が、コレクション購入をジョージ三世かビュート伯のいずれかに助言したのかどうかについては、はっきりしない。

「一七六一年一〇月一八日、ホリス氏はケント氏の訪問を受けた。ケント氏はホリス氏に、一六四一年初頭から出版されたすべての本とパンフレットの、非常に珍しい重要なコレクションについての手書きの説明書を置いていった。ケント氏が知らされていたところでは、この貴重なコレクションは、取るに足りぬ対価で（と彼は心配していた）売却される予定で、ある伯［ビュート］に話しが持ちかけられているということだ

った。しかし、ケント氏は、そのコレクションをした人や、それを所有している人の名前は知らなかった。この情報にホリス氏は、以下の覚書を追加している。『重要であろうこの件について更に問い合わせること、もし可能なら、公衆のために何とかしてこのコレクションを手に入れること』と。この発見の結末は、ビュート伯が陛下の命により三〇〇ポンドでオーモンド街のミス・シッソンからこのコレクションを購入し、ビュート伯から『大英博物館に、寄贈された』こと、ホリス氏が言うに『見事に、誠に見事に』、である。『恐らくコレクションはそこに、長くいつまでも、平和のうち憩うであろう。』」

コレクション、ジョージ三世の援助でビュート伯が大英博物館に寄贈

購入について少し異なる話が、ホリスの『思い出』七一七頁に載り、一七六三年の『年次報告』(Annual Register)一一七頁に再掲載された。一七六三年一二月一七日の、「ロンドン・クロニクル」宛ての手紙に出ている。

「これらのトラクトは、チャールズ二世の命令により、ある一人の紳士によって収集された。その紳士が、最大の努力、勤勉、忠実さをもって彼の仕事を完了した後、チャールズ二世はまことにけちで、そのコレクションに対し、その紳士がとても受け入れられない程度の額しか提示しなかった。そこで本は収集者の家族のもとに一七六一年まであり、その年、ビュート卿により三〇〇ポンドから四〇〇ポンドの間で購入された。しかし、かくも貴重なコレクションが、パリの幾つかの貴族図書館がそうであるように、館内には入ることができない、どこかの私的な図書館に封じ込められるのはいかにも残念なことと考えられ、国王陛下がビュート卿に本の購入代金を払い戻し、その本を大英博物館に寄贈したのである。」

コレクションは、大英博物館理事会に寄贈された。一七六二年七月二二日付のビュート伯の手紙が添えられていたが、それにはこう記されていた。「陛下は、内戦期間のイングランドの歴史にかかわる、約二〇〇〇巻に含まれた約三万二千点のトラクトの珍しいコレクションを購入され、それを公衆の利用のため、大英博物館に送り、そこの王立図書館に保管するよう命じられた。」それらの巻は、元々の綴じ方と順序にできるかぎり近い仕方で綴じ直され、現在置かれている棚に並べられた。

一七五九年の創館以来図書館を豊かにしてきた多くの寄付の中で、われわれが国王ジョージ三世の雅量に負っているこのコレクション以上に、代々の学者、研究者に裨益してきたのもはほとんどない。

マコーリー（Macaulay）、トマス・カーライル、その他多くの著名な著作家たちが、コレクションのさまざまな貯蔵品に大いに頼ってきた。現代の研究者にとっては、トマソン・トラクトはサミュエル・ローソン・ガードナー（Samuel Rawson Gardiner）の名に最も緊密に結び付いているであろう。コレクションの内容についてのガーディナーの知識は、長年にわたる綿密かつ間断ない研究に基づいていて、比類のない程深く、また徹底していた。

コレクションの中で欠けている部分

トマソン・トラクトの歴史からトラクト自体のことに移る。コレクションの完結とジョージ三世によるその購入の日時の間には、一世紀が経過しており、その長期間の間にコレクションは、オクスフォードからロンドンに転送され、恐らく一度ならず、ロンドンのある所から別の所へと移された。こうした年月の間にコレクションの一部が無くなったり、盗まれたりしていても、驚くべきことではない。

次のものが、コレクションが大英博物館に納められたときに無かった巻の完全なリストである。トマソンのカタログに出ている数字をあげる。

小型四折版　No. 87 …… 1642.12.16-21 の 28 トラクト
〃　No. 123 …… 1643.8.26-9.7 の 23 トラクト
〃　No. 815 …… 1659.12.5-29 の 33 トラクト
制定法　No. 12 …… 1654.5-6 の 20 トラクト
八折版　No. 6, 57, 60, 62, 87, 121, 151, 242, 269, 307, 330, 331, 333, 406, 448, 449, 450, 451, 453, 454, 465, 470, 479, 574, 892

コレクションの規模

トマソンは、小さい本にはすべて「八折版」の語を用いており、彼はそれらを日付よりも大きさにしたがって綴じた。無くなっている八折版の諸巻は、日付がまちまちの四一トラクト全部を含んでいた。全部で一四五のトラクトが無くなっていて、それらは二九巻に綴じられていた。

大英博物館理事会の所有となってからの、コレクションの規模についての初期の幾つかの見積もりは、類推の域を出ない。しかし、『書誌学誌』(Bibliographica) 第Ⅲ巻二九一―三〇八頁に掲載された、トラクトについてのおもしろい彼の論文の中でファルコナー・メイダン (Mr. Falconer Madan) は、点数を注意深く計算している。わたし自身の見積もりが彼のものと異なるとすれば、それはわれわれが異なった計算の基準を採用しているからである。わたしは、一つ

一つの本やパンフレットを、それらが同時に出されたときの巻数や分冊の数に関係なく、一点として数える。しかし、分冊が別々に出版されたときには（例えば、エドワードの『壊疽』（Gangraena）の場合、第一部は一六四六年の二月二六日に、第二部は五月二八日に、第三部は一二月二八日に出された）、わたしはそれぞれの分冊を一つの出版物として数える。この方式で計算して、わたしは数を次のように見積もっている。（図1参照）

合計は、二〇〇八巻に綴じられた二二、二五五のものである。

図1

年	パンフレット	手書き本	新　聞	計
1640	22	2	—	4
41	717	—	4	721
42	1966	1	167	2134
43	1091	3	402	1496
44	692	3	673	1368
45	694	3	722	1419
46	804	3	503	1310
47	1058	7	407	1472
48	1408	16	612	2036
49	777	15	554	1346
50	481	5	284	770
51	402	1	356	759
52	427	1	494	922
53	598	15	460	1073
54	526	3	483	1012
55	443	6	350	799
56	402	4	104	510
57	306	1	25	332
58	282	3	103	388
59	652	1	253	906
60	976	4	164	1144
61	218	—	53	271
62	—	—	35	35
63	—	—	8	8
	14942	97	7216	22255

収集はどの程度完璧か

コレクションがどの程度完璧だと考えられるか、という問いがしばしば出されてきたが、これは、絶対的な（無条件の）答えを容認しない問いである。トマソンの企図は、書誌的（出版目録）ライブラリーというより歴史的ライブラリーを形成することだった。その結果トマソンは、同一の本の多数の版を集めることにほとんど意を用いなかった。その一つの良い例が、トマソンのコレクションにある一冊の『王の肖像』（Εικων Βασιλικη）である。トマソンはこれを一六四九年二月九日に出版されたか、彼が受けとったか、したものとして記し、《第一刷》という注を加えている。ところが大英博物館には、一六五〇年三月末以前に出された二二の版が存在し、うち一一は一六四八年の日付であるから、それらは、［現在の］一六四九年二月、三月に出版されたことを示している。

また、トマソンは普通、イングランド、スコットランド、アイルランドの他の町の印刷所から出されたものをロンドンで再版したもので満足していた。元々の版の本が手に入れば明らかに歓迎されたが、しかし、トマソンは、ロンドン以外のところで徹底的に買いまくるほどの資力はなかったから、オクスフォード、ケンブリッジ、エディンバラ、ダブリン、その他の所で出された膨大な数の本、パンフレット、新聞は、全く彼のもとには来なかった。

一六五三年以降、《クエーカー文書》（Quaker Tracts）として知られるパンフレットが、驚くほどの量で溢れ出始めた。トマソンがジョージ・フォックスに当てた形容語（以下、参照）は、当時の、秩序を重んじ、相当の地位にある長老派の市民が、この新しい〈分派〉（Sectaries）の集団に対して抱いていた軽蔑を表現している。従って、クエーカー文書のトマソンによるコレクションは、極めて断片的である。二つの例だけ挙げると、コレクションには、年長のジョージ・フォックスのものは、四四のパンフレット、ジェームズ・ネイラー［フォックスに並ぶ、クエーカー派の伝道説教

者」のものは二四のパンフレットだけある。大英図書館にはそれ以外に、フォックスのトラクトが九三、ネイラーのものが三一あり、それらのほとんどは、一六六一年以前に出ていた。

しかし、以上のような欠陥を斟酌した上で、ロンドンで印刷されたり売られたりした本のコレクションとしては、可能な限り、ほぼ完璧だと言える。この一〇年間わたしは職務により、大英図書館に寄贈されたか、販売カタログに乗っていた、一六四〇年から一六六〇年の間に出された膨大な数の本とパンフレットを精査してきた。そして、膨大な数のクエーカー文書だけでなく、オクスフォード、ケンブリッジ、その他地方の中心都市で出版された相当量の作品も図書館に追加されたが、既にトマソン・コレクションに含まれていないロンドンのパンフレットはわずか五つ見つかったにすぎない。

トマソンによる覚え書き——日付とコメント

一六四一年春トマソンは、トラクトの多くのもののタイトル・ページに、それぞれを入手した時の日付か、場合によっては出版の日付を書き始めた。この覚え書きはこの上なく価値があるもので、これがなければ、時系列に並べることが不可能であった本の日付をわれわれが特定できるようにしばしばしてくれる。しかし、トマソンの日付は有益ではあるが、無謬ではない。従って原則的には、それらは、実際の出版の大体の日付を表すだけと取られねばならない。場合によっては、同じものの二つのコピーに別々の日付が付されていることがある。少なからぬ場合、五、六冊の本が同じ日付を付けられ、その後四、五日空けて、更に数冊が同じ日付を付されているが、これは、トマソンが、同じ日に数冊の本を購入し、それから数日待って次の何冊かも買ったか、あるいは、トマソンは、それぞれの本を入手した正確な日付を記す時間がいつもあったとは限らないことを示している。

手書き文書は合計九七あるが、これらは、コレクションの印刷されたものの部分と一緒に、時系列順に綴じられている。うち八七は、トマソンの筆記したものである。そのリストは、インデックス［別あつらえの索引］の中にある（第Ⅱ巻、七三九―四〇頁）。それらは、〈広告〉（Advertisement）に「国王のために」買われたとしているそれらについての記述をほとんど裏付けない。そうしたものを敢えて出せば、必ず身の破滅をもたらすことになるものである。しかし、それら手書き文書の少なからぬものが、歴史的には非常に価値がある。二、三例を挙げれば、次のようなものである。

- 「一一月のケントの請願」一六四四年（第Ⅰ巻三四六頁）
- 「特命委員会に対する兵士の一致した回答――下院のロビーに貼られていた韻文の演説を添えて」一六四七年六月二日（第Ⅰ巻五一四頁）
- 「ロンドンの徒弟たちへの演説」一六四七年六月一一日（第Ⅰ巻五一八頁）
- 「国王との個人的条約を支持する、国務評議会（The Court of Common Council）？の決議」一六四八年六月二四日、これは恐らく、当時評議員だったトマソンによって書き取られたもの。
- 「チャールズⅠ審理のため最高裁（the High Court）を継続する英下院の条例」（脚注）

（脚注）

これは、「法律となる」には国王や上院の同意は不必要とする決議をした二日後の一月六日に、下院単独の権威で通した最初の「法律」（Act）であることに注目すべきである。この法律は別個に印刷されなかった。また、スコーベル（Scobell）の『法律および条例集 一六四〇―一六五六』にも出ていない。実際は、わたしが見つけ出すことができるかぎりでは、コベット（Cobbet）の『国家的審理』（一八〇九年）の中に初めて印

刷された。

更に、たくさんの詩や警句もあるが、中でも恐らく最も興味深いものは、「……」[不祥](第一巻 七三五頁)である。

手書き文書とほぼ同じぐらい価値があるのは、トマソンのコメントで、八〇以上ある。彼の伝記を跡づけようとしてわたしは既に、トマソンに個人的にかかわる若干のメモを引用した。それらよりもずっと多いのは、入手したときにパンフレットに付した注釈である。ときどきトマソンは、その著者の名を挙げたり、イニシアルを記したり、あるいは推定した著者名を付している。この最後のケースでトマソンが巧みにしている例を一つ挙げれば十分だろう。ピーター・コーネリアス・ヴァン・ザリックニズィー著『貧者を幸せにする道』という題のパンフレットのタイトル・ページに、トマソンは、「わたしは、このパンフレットはヒュー・ピーターズ氏(Mr. Hugh Peters)によって作られたものだと信ずる。彼は、コーネリアス・グローヴァーという名の人をかかえている」(第II巻 二三五頁)と記している。これは、誠に鋭い推論である。

一五もの場合、トマソンは、夜間、あちこちの通りに大刷紙(ブロードサイド)――彼は普通これを〈リベル〉(Libell, 誹毀(ひき)文書)と名付けている――が、ばら撒かれたと、と記している。他の若干の場合トマソンは、パンフレットあるいは大刷紙がウェストミンスター・ホールで配られたとか、教会の玄関に貼り付けられたとか、クエーカーにより配付された、と述べている。時々トマソンのメモは、興味深い出来事を記録したり、風刺的な性質のものもある。以下に若干の例を挙げる。

● 一六四二年六月一八日。「陛下の意向なしに軍隊召集を禁ずる布告」。トマソンは記す。「この布告はロンドンの行政官(Sherifes)によって布告されるはずだったが、そうしようとして彼らは馬からたたき落と

された。」（第I巻 一二二頁）

- 一六四二年六月。王党派神学者トマス・チェシャー（Thomas Cheshire）の説教。トマソンは「著者のために印刷された」という言葉に次のメモを加える。「他にだれも出そうとしないので」（第I巻 一二六頁）
- 一六四六年四月。ジョン・グラント（John Graunt）「主の食卓におけるキリスト教的自由の擁護」。著者名の後に、「バッカーズベリーの糖菓製造業者」の語。（第I巻 四三〇頁）
- 一六四七年八月二日。ギルドホールで、重大な暴動が起こった。多くの怒った独立派が、「ギルドホールでの血なまぐさい殺人にかかわった、亡くなった市長、市会議員バンス、その他に関する、軍および上院への二つの請願」を出版した。トマソンは、「いずれも忌わしいほど偽り」というメモを加えている。（第I巻 五六三頁）
- 一六五二年三月二二日。ウィリアム・リリー（William Lilly）によるトラクトにトマソンは、第I巻 八六四頁に出ている、ここでは引用できない形容語［“Catamite”＝稚児、ホモの相手］を著者名のところに付加している。
- 一六五七年六月一日。ジョージ・フォックス（George Fox）の名にトマソンは加える。「別名、あほう［ガチョウ］のクエーカー」（第二巻 一八七頁）

以上の少数の例は、トマソンのコメントの興味深い性質を例証するのに十分だろう。

コレクションに付属するカタログ

コレクションには、一二巻に収められた二つ折版（フォリオ）写本（MS）のカタログが付属している。このカタログはバグフォード（Bagford,「マンスリー・ミセラニー」誌、第Ⅲ巻 一七七頁）により、競売人マーマデューク・フォスター（Marmaduke Foster）に帰されているが、わたしは、それがジョージ・トマソンの指示の下に編纂されたことに疑いはありえないと思う。記載（entries）は何人かの異なる人々の手でなされており、恐らくそれらはトマソンの従業員により書き写されたものである。

疑いもなくトマソン自身の手で書かれた唯一の文章は、第Ⅰ巻の第一頁の余白に記されたモットーである。すなわち、「子孫にとって導き手（presidents）となりうる行為は記録されるべきであり、注意深く保持するに値する。ノウ、トルコ、歴」である。この言葉は明らかに、リチャード・ノウルズ（Richard Knolles）著『トルコ人の歴史』からの引用だが、遺憾ながら、この引用を確かめることがまだできないでいる。

時系列順に見出し（entries）を並べるという原則は、彼のカタログ全体を通してトマソンにより採用されたが、しかし、不幸にも作品を小型四つ折本、大型四つ折本、二つ折本、八つ折本、法律の五部門に分けたために、それは損われてしまった（最後の「法律」（Act）というのは、少々不可解な表題である。というのも、そこには、制定法と条例だけでなく、多くの政治的パンフレットが含まれているからである）。かくして読者は、トマソンのカタログからある特定の日時の本やパンフレットを得ようとするとき、五部門の各部門を見てみなければできないことになる。これは、トマソンの元々のカタログを印刷し、配るというカーライルの提案（『大英博物館王立委員会における証言記録』一八四〇年、二七八、二八二頁）の実用性（Practicability）を著しく妨げるものである。

本カタログの三区分

本カタログは、三区分（sections）に分けられている。第一区分は、コレクションに含まれたできるかぎり、それらが記録する出来事の日付に従って並べられている、全刊行本、パンフレット、手書き文書の時系列的リストから成っている。特定の出来事に言及していない本やパンフレットの場合には、トマソン自身の日付が使用されている。トマソンが何らか情報を与えていないかなりの場合、出版の月をテキストかもしくは他のところから見いだすことができた。そういう場合はすべて、本を各月末のところにまとめた。出版の年を見つけるか推測することがかろうじてできた他の場合は（幸いにもそれほど多くはない）本は、それらが言及している年の年末のところに置かれた。全体を通して、各年が一月一日で始まる新しい暦法が採用された。コレクションの他の部分と切り離されている一六五八―一六六一年の少数のトラクトは、それらの本来の場所に挿入するのを許すには遅すぎて見いだされた。それらは、第Ⅱ巻の四四一―四四六頁の付録のところに置かれている。

カタログの第二区分は、新聞に充てられているが、それらは、発行の年と月に従って時系列的に並べられているので、読者は、一六四〇年［正確には一六四一年］から一六六二年の各月にどんな新聞が印刷されたか一目で知ることができる。

第三区分は、インデックス（索引）から成り、それには、本とパンフレットなどのタイトルに加えて、人物と場所、宗教的・政治的団体、歴史的出来事、そして、事実、読者の助けとなるであろういかなることも含まれている。

このインデックスでは、それぞれの本のタイトルは、著者名が分かる場合にはその名前のところに出ている。著者名が分からない本は、そのタイトルの最初の単語のところに入れられている。一方、ある特定の出来事とか主題にかかわ

る本はすべて、それらが言及する出来事なり主題の見出しのところに見いだされる。新聞は、それらのタイトルのもとに索引に載せられ、その後に発行期日が続く。

終わりに

このカタログが印刷されて以来、ファルコナー・メイダン氏（Mr. Falconer Madan）は、内戦の期間に出され、レオナード・リッチフィールド（Leonard Lichfield）や他のオクスフォードの印刷業者の奥付を持つたくさんのパンフレットが実際にはロンドンで印刷されたことを発見した。

コレクションのカタログとインデックスを作る作業は、わたしが編集責任を取り、刊行本部の助手たち、R・F・シャープ（Sharp）、R・A・ストリートフィールド（Streatfeild）、W・A・マーズデン（Marsden）の各氏によって遂行された。

G・K・フォーテスキュー（Fortescue）
大英博物館図書部長

Ⅲ　「マイクロフィルム版索引への手引き」（一九八一）（翻訳）

序論

イギリス史上一六四〇年―一六六一年の時期は、歴史上に極めて重要な時期であり、また重大な社会的、政治的変化の時期であった。**トマソン・トラクト・コレクション**は、この歴史を画する時代を描く文書資料で、ジョージ・トマソン（George Thomason）が同時代に収集した本、パンフレット、新聞、手書き文書のユニークなコレクション、現在は大英博物館にある。それは、二一四二巻に納められた二三、九二六余のトラクトからなるが、それらは、大英図書館と協力してUniversity Microfilms International社が出したマイクロフィルムで今や利用可能である。

マイクロフィルム版は九ユニットからなり、各ユニットは大よそ一〇万頁である。トラクトはすべて基本的に一六分の一に縮小してマイクロフィルム化されており、三五ミリのシルヴァー・ハロゲン化・ロールのマイクロフィルム［リール二五六個］で利用できるようになっている。コレクションは、［二一四二］巻が並べられている通り、トラクト番号順にフィルム化され、一般に公開された。各トラクトの先頭にはトラクト検索記号が付いている。［マイクロフィルムの］各リールの冒頭に写真になっている内容目次で、そのリールに出てくるトラクトが分かる。

このマイクロフィルム版には、フォーテスキュー（G. K. Fortescue）が編集し、一九〇八年に大英博物館が出版した『ジョージ・トマソンにより収集された一六四〇―一六六一年の、内戦・共和国・王制復古にかかわるパンフレット、本、新聞、手書き分文書の目録』（Catalogue of the Pamphlets, Books, Newspapers, and Manuscripts Relating to the Civil

War, the Commonwealth, and Restoration, Collected by George Thomason, 1640-1661)［略称『トマソン・コレクション目録』］が含まれる。フォーテスキューのこの二巻本『目録』［各巻二分冊、計四分冊で出版されている、赤本］は、トラクトの出版日付、もしくはパンフレットが扱っている出来事の日付により、時系列的に並べられている。またマイクロフィルム版には、発行の年と月に従った新聞の時系列索引も含まれている。アルファベット順の著者・タイトル・主題索引［赤本・2b、四四七頁以下］を使えば、トラクトに更に近づくことができる。

本索引［薄茶本・1］について

トマソン・トラクト・コレクションのトラクトE1(1)-669f27(20)用の本索引［薄茶本・1］は、マイクロフィルムの文書と同じく、トラクト番号順に並べられている。これは、『目録』［赤本］およびドナルド・ウィング(Donald Wing)の『ショート・タイトル目録　一六四一―一七〇〇』(Short-Title Catalogue……, 1641-1700)［薄茶本・2］と一緒に使用するように作られている。コンピューターで作成された本索引［薄茶本・1］を見ると、各トラクトが『目録』［赤本］のどの巻の何頁に載っているか、そのトラクトがいつ出版されたか、D・ウィングの『ショート・タイトル目録』［薄茶本・2］に分類されている場合はその分類番号、それからマイクロ・フィルム・コレクションのリール番号などが分かる。本索引の第二部［薄茶本・2］は、D・ウィングの番号で見て、それがトマソン・トラクトのどれに当たるかを示す。以下の例で、トマソン・トラクト索引第一部［本書、薄茶本・1］に情報がどう並んでいるかを示す。(**図2**参照)

マイクロフィルム版のトラクトの一部は、フォーテスキューの『目録』［赤本］に含まれなかった。その場合、本索引［薄茶本・1］の〈巻―頁〉のところは空白になっている。若干の場合、コレクションのトラクト番号が、フォーテ

図2

トラクト番号	巻と頁	日　付	ウィングによる番号	リール
E3 (4)	1－335	July 23, 1644	D2008	1
E3 (5)	1－334	July 16, 1644	A3876	1
E3 (6)	3－	July 23, 1644－July 23, 1644		1
E3 (7)	1－35	July 24, 1644	H857	1
E3 (8)	3－	July 17, 1644－July 24, 1644		
トマソン・トラクト番号『目録』[赤本] にあることを示す。またマイクロフィルムの検索記号にもなる。	フォーテスキューの『目録』[赤本] の巻と頁を示す。例えば3－は「新聞」のセクションを指し、第2巻371-466頁にある	日付は『目録』[赤本] にあるもの	ウィングの『ショート・タイトル目録』にあることを示す。書誌については同目録を見よ	マイクロフィルム・コレクションのどのリールにあるかを示す

スキューの『目録』[赤本] に用いられている番号と異なっている。そういう場合は、脚注にフォーテスキューで用いられている番号が示してあるので、その書誌的な説明を見ることができる。文書はすべて、トラクト版に綴じてある順序で撮影された。そのため、一つのトラクトの中で時間順の番号となっていないこともある。

われわれはまた、本索引 [薄茶本] にいろいろな記号を用いて、『目録』[赤本] の中の相互参照箇所を示したり、撮影時のコレクションのマイクロフィルム版と、フォーテスキューの『目録』[赤本] に出ている見出しの他の種々の相違点を指摘している。これらの点は、xi頁にある《使用記号の一覧》のところで説明している。

コレクションの利用法

トマソン・トラクト・コレクションのマイクロフィルム版は、幾つかの方法で容易にアクセスできる。以下は若干の例である。

時系列で（Chronologically）

『パンフレット、本、新聞、手書き文書……の目録』［赤本］は、日付によりアクセスできるようにする。それで利用者は、ある特定の出来事について、コレクションにあるその件に関連するいろいろな文書を調べることができる。例えば、一六四九年一月三〇日（January 30, 1649）を見ると、チャールズ一世が斬首されている。『目録』でJanuary 20-27の見出し（Entries）を見ると、高等裁判所での国王チャールズの裁判、一月三〇日処刑との判決言い渡し、一月三〇日以降のチャールズの死に関する国王頌徳と哀悼の辞などがある。マイクロフィルムにある特定のトラクトを見つけるのには、リール番号を特定するため、本索引［薄茶本・1］で、トラクト番号を調べればよい。

新聞

『目録』は、第二巻［赤本・2b］の三七一―四四〇頁で、新聞を別個にリスト・アップしている。この新聞リストは、本索引の〈巻―頁〉欄に「3―」と表記されている。特定の日付が知られている時系列的ないろいろば出来事を追うときは、新聞リストでその年と月をチェックし、マイクロフィルムで読むため、該当するトラクトを選ぶのが有益だろう。ある特定の新聞記事を見るためには、利用者は何ヶ月かの新聞のリストでタイトルを探し、それから特定されたさ

まざまなトラクトを読まなければならない。個々の新聞の号は、コレクション全体に散らばってある。

著者もしくはタイトルの見出しで

著者もしくはタイトルの見出しでアクセスするのは、フォーテスキューの『目録』第二巻［赤本・2b］四四七―七六七頁の索引を用い、匹敵する見出しとトラクト番号を見つけ、本索引［薄茶本・1］によりリール番号を特定して、できる。

トマソン・コレクションの本、文書類の少なからぬものが、ウィングの『ショート・タイトル・目録』に挙げられており、こちらで著者もしくは主要見出しで見つけることができる。トマソン・コレクションのものは、ウィングでは、"LT"という場所の記号で示されている。ウィングの番号を用いるとき、本索引第二部［薄茶本・2］にあるウィング参照索引（the Wing Cross Index）をチェックすれば、匹敵するトマソン・トラクト番号と、そのトラクトが納められているリール番号が分かる。

主題（トピック）で

フォーテスキューの『目録』第二巻［赤本・2b］四四七―七六七頁にある膨大な索引は、著者もしくはタイトルの分析に加えて、トラクトの主題別の分析も提供する。この索引を活用して、利用者は、ある主題についての見出しを見つけることができる『目録』［赤本］の巻と頁が分かる。適当な見出しが見つかれば、利用者は本索引［薄茶本・1］により、フィルムの上のトラクトを特定することができる。

企画明細

《コレクションの規模》二三、九二六トラクト　二、一四二巻　販売ユニット九
《マイクロフィルムの体裁》三五ミリのロール
《縮小比率》一六対一
《陽陰》（ポラリティ）――陽画（positive）
《フィルム・タイプ》古文書保管用フィルム（archival film）のANSI規格PH1. 28-1973およびPH4.8-1971に適合した、シルヴァー・ハロゲン化フィルム
《別あつらえの利用補助手段》
『目録』（Catalogue of the Pamphlets, Books, Newspapers, and Manuscripts Relating to the Civil War, the Common-wealth, and Restoration, Collected by George Thomason, 1640-1661. London: 大英博物館、一九〇八、二巻本［赤本］

『目録』［赤本］は記録する出来事の日付もしくは出版日付により、トラクトを時系列順にリスト・アップしている。『目録』［赤本］は、新聞用の索引と、著者・表題・主題別の索引も含む。『目録』［赤本］は、トマソン・トラクト・コレクションに一緒に含まれる。

『目録』［赤本］とマイクロフィルムにアクセスできるようにする、トラクト番号順に並べられた索引［薄茶本］は、コレクションについている。この索引［薄茶本・1］は、各トラクトの発行日を示すと同時に、ウィングの検索番号（ドナルド・ウィングの『ショート・タイトル・目録』にリスト・アップされている場合は）、トラク

トが納められているマイクロフィルムのリール番号、およびフォーテスキューの『目録』[赤本]の頁などを示す。

『目録』[赤本]はまた、トマソン・トラクトの番号と、マイクロフィルムのリール番号を指示する、ウィング番号順にリスト・アップした参照個所も含んでいる。

《複写コピーの作成》(Hard Copy Availability)

個々のトラクトの拡大複写コピーは、使用料規程に基づいてできる。引用は、許可を得て可能である。

《内部にある利用補助手段》

マイクロフィルムの各トラクトには、検索記号が先頭にあり、トラクト番号が分かる。各リールの冒頭に写真で写してある内容一覧は、そのリールに出てくるトラクトを示す。

使用記号の一覧

次の記号が、コレクションの検索番号や、フォーテスキューの『目録』[赤本]で使用された。

※　※※　こうした印がトマソン・コレクションの番号打ちに用いられ、フォーテスキューの『目録』[赤本]に出てくる。本索引[薄茶本]や、フィルムでトラクトを特定する目印の上に、そのまま再現されている。

A、B、C、……上と同様、時々アルファベットの文字が、コレクションの中の別々のものを区別するために、トラクト番号の後に付けられる。

次の記号は、トマソン・トラクトのマイクロフィルム版の作成と、本索引［薄茶本］の作成に用いられたものである。

@　このしるしは、本索引［薄茶本］において、同一のトラクトが複数の日付のもとに指示されている、『目録』［赤本］の関連個所参照見出しを示すために用いられた。

#　コレクションにおいて同一のトラクト番号が付された、二つの別々のトラクトを区別するため用いられた。

［　片側括弧は、コレクションにおいて連続で番号を打たれているトラクトが、『目録』［赤本］においては各括弧内の最初のトラクト番号のもとに示されている個所で用いられている。

注――ただ一つのもので成っているトラクトは、『目録』［赤本］では、全体的なトラクト番号（the general tract number）で示されている。例えば、フィルムと本索引のE908（1）は、『目録』［赤本］のE908のところに見い出される。